

姉崎とイタリア

スザンナ・フェスラー

Abstract

Anesaki Masaharu, the esteemed scholar of comparative religions at Tokyo University, spent three months in Italy in 1908. One of the objectives of his journey was to visit the homeland of Saint Francis of Assisi and find comparisons between Francis and his contemporary, the Japanese Pure Land Saint Hōnen. He also examined the similarities between the Roman Catholic Church and established Buddhism, concluding that both were corrupt and in need of a spiritual revival, led by a charismatic leader such as Francis or Hōnen. These thoughts are expressed in literary, not expository, form, in the travelogue *Hanatsumi nikki* (Hakubunkan, 1909).

Keywords : Hōnen, Francis of Assisi, Anesaki Masaharu

1908年（明治41年）、姉崎正治は35歳で、二度目の欧米旅行を果たすこととなった。この旅は、フランスのカーン財団の世界巡回資金の援助を受けて、諸国民の事情を研究するのが目的であった。その当時、姉崎は東京帝国大学文科教授であった。専門は比較宗教学で、その分野のパイオニアとみなされ、明治38年に設置された宗教学講座の初代教授として就任していた。姉崎の『花つみ日記』という紀行文は、この時のイタリア及びスイスへの旅の感想を綴ったものである。

この旅行は主として宗教学的なことに重点がおかれた。姉崎はアッシシの聖フランシスの生涯をたどり、聖フランシスと日本の法然上人を比較しようとした。また姉崎は、ローマのカトリック教会およびその教皇制度を調べ、さらにカトリック教会の西洋での発展と浄土宗の日本での発展との類似点を探るといった目的ももっていた。その他、14世紀の画家、特にフラウ・アンジェリコがどのようにフランシスとその他の聖者を描写したかということも知りたかった。

姉崎は1907年（明治40年）にフランスに至り、パリからスイス、イタリア、オーストリア、ドイツを廻り、1908年6月に再びパリへ向かった。その後同年9月にオックスフォード大学で開催された第三回国際宗教学宗教学史会議に出席し、第二部会「中国と日本の宗教」において“Buddhist Influences upon the Japanese Hōnen”を発表した。

姉崎はイタリアでは、主にフィレンツェ、アッシシ、ローマに滞在し、その滞在中に、イタリアの雑誌 *Coenobium* の編者エンリコ・ビニヤミ氏（Enrico Bignami）とフランシスの伝記の著者ポール・サバチエー氏（Paul Sabatier）を含む、スイスやイタリアの知人達を訪問した。

姉崎のイタリアの印象は、宗教的なものと歴史的なものに強く影響されている。14世紀のイタリアは、国家教会が低迷もしくは墮落したともいえる状態にあり、その復活にはフランシスのようなカリスマ性をもった、好感もてる先導者が必要であったのだろうと姉崎は考えたのである。そしてこの観点から、日本との類似点を多くあげている。鎌倉時代の仏教は同じ様に低迷していたが、法然上人は、既成宗派に反対し、好感の持てる先導者として民衆に迎えられた。後に法然は流罪となったが、フランシスもまた国教会に敬遠されたのである。つまり姉崎は20世紀のイタリアにおいて、カトリックの低迷そして民衆とのギャップの広がりという14世紀と同様の現象を目の当たりにし、(明言したわけではないが)日本の仏教においても、同じ問題があったのではないかと推察していたようなのである。

ベデカーという旅行案内書を携え、美術史や歴史のことを詳しく勉強する20世紀の典型的な観光客と異なり、姉崎は、ルネサンス時代を美術が復活した時期というよりも、美術が高度に装飾過多になった時期だと見ている。フィレンツェに行った時には、もちろんルネサンス絵画を評価するにはしたが、次のような結論に達している。

食事後ジオットーに関する本とフランシスの一代記の一節とを読み、それからあすの用意に聖マルコの寺に関する本を見た。そこで考えるには、この花の都、詩の里、ルネサンスの本據に来ては、どうしても心がルネサンスの華麗な美術に奪われる。此处一つ決心してアッシシを経てローマに行くまでは聖フランシスとジオットーとフラ・アンジェリコとのみに心を凝らさなければならぬ。ラファエルにせよ誰にせよそれ等の画には目を向けずに、二人の画聖に集中しなければならぬ。フィレンツェに来てラファエルを見ないのは御馳走を前において断食するに均しいが、断然この断食を実行しよう。ルネサンスの御馳走は浮世の珍味である。いくらラファエルが聖母を画いても人間世界のものである。それに勝れた醍醐味を嘗めるには浮世の断食をしなければならぬ。ジオットーの信仰、フラ・アンジェリコの法悦に出来た画は天上の不死の味である。それさえあれば他は入用なしとなる修行をしよう。此う決心をした。人は何と見るとも、又自分にも苦しくとも、ルネサンスの美術は見ない。只リッピと(Lippi¹⁾)マサッチオ(Masaccio²⁾)との画だけはアンジェリコと同じものとしてそれもブランカッチ堂³⁾だけを見よう。この覚悟であすから見物、否巡礼をしよう。今日の一日、日のくれの二時間は実に有りがたい教訓を得た⁴⁾。

姉崎は決してありきたりの観光客ではなかった。彼のイタリア滞在は美術的娯楽ではなく、自身の宗教性の向上を目的とした巡礼であった。それゆえ鋭い感受性を持ってフィレンツェ、アッシシ、ローマを訪ねた彼の旅の焦点は、普通とは全く違ったものとなったのである。

イタリアに赴く前の姉崎のイタリアに対する印象は種々の書物から得たものであった。特に強い影響を受けたのはサバチエ著のフランシス伝記と *Il Fioretti (Fioretti di S. Francesco d' Assisi)* 又は『聖フランシスコの小さき花』)であろう。実際、『花つみ日記』のイタリア語の表題紙に「*Fioretti d' Italia*」と書かれている。他に影響を与えた書物はフォガツァロの小説『聖者』(*Il Santo*)とエミール・ゾラの三都市叢書『ルルド』『ローマ』『パリ』である。姉崎はフォガツァロとゾラの主人公達に同情し、自分の旅行中にも彼らを探していたような感がある。東アジア

で仏教に関心のあった姉崎が、ローマでカトリック教会に興味を示したのは当然かもしれない。しかしよく知られているように、明治時代に欧米を旅行した日本人は、大方はイタリアではなくて、イギリス、フランス、ドイツ、ロシア、アメリカへと向かった。姉崎がイタリアを選び、さらに彼の関心が大衆的なものを越え、知的で霊的な面に集中したことはここで注目するに値する。彼の目には、確かにイタリアは、信仰の中心として、しかも歴史の流れの中で人間への永遠の希望を示唆してきた場所として映ったのである。

姉崎は、フランシス時代のような宗教的な信仰の復活を希望していたが、彼の知り合いのうちに同調した者がいたかどうかははっきりしない。たとえばマルクス主義のビニヤミは姉崎の宗教的傾向をどう考えたのであろうか。『花つみ日記』にはビニヤミとの会話を描写するところはめずらしく簡潔で曖昧である。それどころか、ビニヤミとの会話よりも、ビニヤミ婦人と子供との会話を詳しく述べている。ただ、ビニヤミとの関係は悪くなかったらしく、姉崎が書いた記事が二三回ビニヤミが編集した雑誌 *Coenobium* に掲載されている。

『小さき花』を片手にアッシシへ行く巡礼者と同様に、姉崎は『法然上人絵伝』を携えイタリアを巡礼した。この絵伝から啓示を得た彼は、それを知人に見せることで啓示を分かち合おうとした。『花つみ日記』にも時おり絵伝のことを述べている。

食事後は又イギリスの人等と画の話し。その中にフランスの伝をかいなお婆さんのミス・ストダート (Miss Stoddart⁵) という人に紹介されて、法然上人の事を少し話したが、日本にも誰れかフランスに似た人があろうと思って居たが、一寸書物などで見ても分からなかったと大喜び。法然上人絵伝の写しを見せ、又それから画の話しに帰って、ラファエル以後の墮落の原因や、ジオットーの画いたフランスの顔が必しも肖像でないが、当時の人心に映じた跡である事や、面白く有益な話して互に別をつけて、各部屋に帰った⁶)。

法然上人の影は姉崎を追ってアッシシのどこにでもついてまわった。姉崎が機会さえあれば法然のことを話した一哲学者レンシ (Guiseppe Rensi) の婦人に何かを書いてくれと頼まれた時、彼は法然上人の和歌⁷) を引用した。フランスの「日光の頌」(Cantica del sole) について考え、法然の和歌を思い出したのである⁸)。先のミス・ストダートと、もう一人のイギリスからの知り合いであるゴードとの晩餐の席上でも、姉崎は法然のことをもちだしている。

食後には、ストダートとゴード⁹) と三人で、色々な話しが出、互に今日の昼見て来た事や、学校の事、それから話しは法然上人に移った。勅修御伝の画の写しを見せて、上人の一生や信仰の話しをしたが、二人は喜んできいてくれ、又上人とフランスと相似ておる事も十分に賛成してくれた。¹⁰

旅行中の姉崎が西洋人を浄土宗に改宗させたはずはないであろうが、しかし彼の宗教的な意図は誠実で、切迫したものであったろうことに疑いはなく、観念論的であったともいえる。

姉崎氏はフィレンツェで14世紀の美術に浸り、アッシシで聖フランシスの生涯をたどった後、ヴァチカンを見るためにローマに向かった。ゾラの『ローマ』やフォガツァロの『聖者』を読

んだばかりの姉崎は強い先入観を持って、永遠の都を訪れたことであろう。もちろん、ローマの建築や旧跡の美、その哀れを無視するのは不可能であったが、姉崎は、見た物に対し明らかに批判的であった。聖ピエトロで行われた礼式の威風は気に入ったが、それを見ながら教皇及びローマ教会全体が教区市民とかけ離れ、そのため教会世界における地位が不安定になったと感じた。ローマ教会及びイタリア全土が主要な変革の先端にあったことは周知の事実として回顧されるが、姉崎の立場から見ると、その将来は不明瞭で、歴史が繰返されるという凶兆は明らかであった。ローマ市についての最初の記述は、「アッシシを去って、ローマに来た。山中の静かな古風の町から賑やかな混雑な町に来ていやな気がする」で始まる。悪い兆しは多々あった。宿はどこも一杯で、市内の電車はどれも満員で聖ピエトロまで歩くほかなかった。聖ピエトロについては、「此の前にもこの堂の正面には失望したが、今度は特にアッシシの奥ゆかしい古物を見て来た眼には一層面白くない」と書いている。聖ピエトロは「俗気」であり、「田舎の順礼は驚いても、目のあるものは却ていやに思う」。姉崎の宿には話し相手もなく寂しかった。また次の五月四日の記述では、教皇のふさわしからぬ分離に焦点を当て、色々な面からヴァチカノを批判している。とりわけ興味深いのは、同じような批判をして発禁となったフォガツザロの小説に触れ、結びに自らの和歌を記していることである。

世を救ふあととはつげども、ヴァチカノに
こもる召うど足ふみも出ず

姉崎はローマの深い歴史に興味を持つには持ったが、感動はしなかった。おそらく、彼の日本での読者は数少ない博識な人々であっただろうが、とにかく姉崎は様々な場所を旅行し、見たものの細部を記述した。その記述は旅行ガイドにあるような歴史資料と個人的な注釈との混合であり、時には六年前の欧米紀行のこと、時には西洋の伝説も含んでいる。例えば、サンタ・マリア・アラコリでは「ローマ帝国衰亡史を書いたギボンはフォロの廢墟からこの寺に這って、つくづく古今の変を思っ、その大歴史を書く考えを起したというが、いかにもそういう感じが誰れにも起る」11)と述べている。このギボンについての話は西洋学者にはよく知られていると思うが、日本学者にはあまり知られていなかったのであろう。ともかく姉崎がイタリア史を詳しく知っていたのは確かで、ちなみにギボンについて述べたのは読者も彼と主題を共有できると期待してのことであろう。

もう一例をあげよう。ローマの景色への姉崎の反応は、彼がフォロ・ロマノを訪問した時に明らかとなる。思い起こされるローマの過去の栄光、しかし今やその面影さえもなく、廢墟に広がる花咲く草地だけが残されている。姉崎はその事実に感動し、次の和歌を詠んだ。

色あせし宮居の跡に人のわざ
あざけらんとてや千々の花さく

ローマ帝国の繁栄と没落は姉崎の世界展望に完全に合致した。ローマ帝国の繁栄は、人間のあらゆる営みと同様、虚しいものであり、やがて終わりを迎えることとなる。結局、姉崎にとつ

てイタリアとは、精神的な復活の可能性を秘めた場所ということになるだろうか。

注

- 1) リッピは Filippino Lippi (ca. 1459-1504) である。
- 2) マサッチオは Tommaso di Ser Giovanni Guidi da Castel San Giovanni (1401-28) である。
- 3) ブランカッチ堂は Santa Maria del Carmine に付属され、ベデカーに次のようにいう。“[it was] embellished after 1423 (?) by Masaccio, probably with the assistance of Masolino, with celebrated frescoes from the traditions regarding the Apostles, especially St. Peter, to which Filippino Lippi added others about 1484.” (Karl Baedeker, *Italy Handbook for Travellers: Northern Italy* (Leipzig: Karl Baedeker, 1903), p. 509).
- 4) 『花つみ日記』（博文館, 1909) pp. 87-88.
- 5) Anna M. Stoddart (1840-1911) のフランシス伝記 *Francis of Assisi* は 1903 年に出版された (London: Methuen).
- 6) 『花つみ日記』 p. 200.
- 7) 「露の身はこゝかしこにてきえぬともこゝろはおなし花のうてなぞ」（勅修御伝三十四巻）
- 8) この和歌は 勅修御伝三十巻にあるが、姉崎は誤って記憶している。姉崎の引用は「月影のてらさぬくまはなけれどもながむる人の心にぞすむ」であるが、勅修御伝には「月かげのいたらぬさとはなけれどもながむる人のところにぞすむ」とある。続千載集にも出る（981）。
- 9) Harold Goad (1878-1956) は、Laboratorio San Francesco（アッシシの Via Metastasio にある貧しい子供のための学校）のを創立し、フランシス派について研究もした。
- 10) 『花つみ日記』 pp. 229-230.
- 11) ギボンの自叙伝に、“It was at Rome, on the 15th of October 1764, as I sat musing amid the ruins of the capitol, while the bare-footed friars were singing Vespers in the temple of Jupiter, that the idea of writing the decline and fall of the City first started to my mind.” (*The Autobiographies of Gibbon*, p. 303) とある。